



令和8年度全国学力・学習状況調査の結果概要

～千歳市立小中学校における調査結果～

千歳市教育委員会

令和8年度全国学力・学習状況調査の結果概要

1. 調査の概要

(1) 調査の目的

- 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- 学校における児童生徒への学習指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- 以上のような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

(2) 調査対象

国・公・私立学校の小学校第6学年、中学校第3学年 原則として全児童生徒

(3) 調査内容

- 教科に関する調査〔国語、算数・数学、英語〕

中学校英語は、**文部科学省 CBT システム (MEXCBT)** によるオンライン方式で実施

出題範囲は、調査する学年の前学年までに含まれる指導事項を原則とし、出題内容は、それぞれの学年・教科に関し、以下のとおりとする。

- ① 身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能 等
- ② 知識・技能を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力 等

出題形式について、記述式の問題を一定割合で出題する。英語「話すこと」に関する問題の解答は、原則として口述式とする。

- 質問調査（オンライン方式）

- ① 児童生徒に対する調査（学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査）
- ② 学校に対する調査（指導方法に関する取組や人的・物的な教育条件の整備の状況等に関する調査）

(4) 調査実施日

令和8年4月23日(木)

※中学校英語の実施日 令和8年4月20日（月）～23日（木）のうち1日

(5) 本市における調査実施学校数及び児童生徒数

小学校 17校 771名 中学校 8校 740名 ※北進小中学校を除く市内小中学校

* 学校質問調査の結果について

質問調査では、調査項目が変更となる場合も多いことから、次の4観点に沿って質問項目を抽出し、千歳市の状況を把握することにした。

- ① 千歳市学力向上検討委員会の学校への提言の取組状況や課題を把握する。
- ② 千歳市教育委員会の「学力向上を目指す施策」の効果や改善に向けた課題を把握する。
- ③ 千歳市教育委員会が重要課題として位置付けている「小中連携・一貫教育」の取組の状況や取組の充実に向けた課題を把握する。
- ④ 児童生徒と学校の意識の違いを把握する。

2 教科に関する調査結果

(北海道教育委員会の分類方法による9段階)

相当高い	… 7ポイント以上	ほぼ同様(下位)	… -1ポイント以下-3ポイント未満
高い	… 5ポイント以上7ポイント未満	やや低い	… -3ポイント以下-5ポイント未満
やや高い	… 3ポイント以上5ポイント未満	低い	… -5ポイント以下-7ポイント未満
ほぼ同様(上位)	… 1ポイント以上3ポイント未満	相当低い	… -7ポイント以下
同様	… ±1ポイント		

調査に準じ、問題を学習指導要領の内容(または領域)、評価の観点、問題形式と分類し、区分別に集計している。各教科の領域は、学習指導要領の内容(または領域)内の区分とし、新たな領域は過去の同系統のデータを参考にする事とした。なお、従前と同じ名称の場合は過去のデータを関連づけて比較・検討しているが、領域間で移行した学習内容もあり、領域名が同じであっても同一の内容ではないことを付け加えておく。

(1) 小学校教科全体 ()は、国から提供されたデータをもとに道教委、千歳市が独自に算出した小数値
全道：道内の全公立小学校 全国：国内の全公立小学校

小学校教科全体		国語	算数
平均正答数	千歳市	7.4問/13問	7.9問/16問
	全道	7.8問/13問	8.6問/16問
	全国	7.9問/13問	9.0問/16問
平均正答率	千歳市	57%(56.9%)	50%(49.6%)
	全道	60%(59.6%)	54%(53.6%)
	全国	60.9%	56.4%
全道との比較		ほぼ同様(下位)	やや低い
全国との比較		やや低い	低い

国語については、全国を4.0ポイント下回り、全国と比較して前回の「ほぼ同様(下位)」から「やや低い」の段階となった。算数については、全国を6.8ポイント下回り、全国と比較して前回の「やや低い」から「低い」の段階となった。

(2) 中学校教科全体 ()は、国から提供されたデータをもとに道教委、千歳市が独自に算出した小数値
全道：道内の全公立中学校 全国：国内の全公立中学校

中学校教科全体		国語	数学	英語
平均正答数	千歳市	9.2問/15問	8.4問/16問	3.5問/7問
	全道	9.5問/15問	8.8問/16問	3.5問/7問
	全国	9.6問/15問	9.1問/16問	3.7問/7問
平均正答率 IRTスコア(英語)	千歳市	61%(61.2%)	52%(52.4%)	477
	全道	63%(63.3%)	55%(55.0%)	489
	全国	63.9%	57.0%	499
全道との比較		ほぼ同様(下位)	ほぼ同様(下位)	-12
全国との比較		ほぼ同様(下位)	やや低い	-22

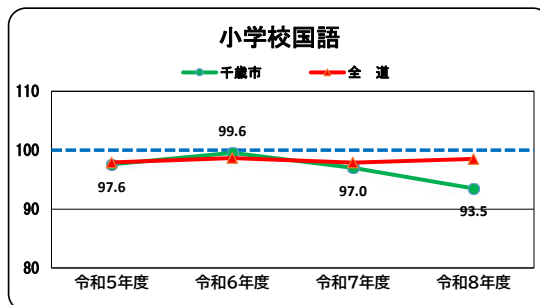
国語については、全国を2.7ポイント下回り、全国と比較し前回の「やや低い」から「ほぼ同様(下位)」の段階となった。数学については、全国を4.6ポイント下回り、全国と比較し「相当低い」から「やや低い」の段階となった。IRTスコアで示されている英語については、全国を下回った。

(3) 小学校国語

平均正答率は、全国との差が広がり、前回の「ほぼ同様（下位）」から「やや低い」という結果となった。区分別では、「情報の扱い方」が前回は上回った。すべての区分で全国を下回った。

【平均正答率】 上段：平均正答率、下段：全国平均を100とした指数

	令和5年度	令和6年度	令和7年度	令和8年度
千歳市	65.6 97.6	67.4 99.6	64.8 97.0	56.9 93.5
全 道	65.8 97.9	66.8 98.7	65.4 97.9	59.6 97.9
全 国	67.2 100	67.7 100	66.8 100	60.9 100

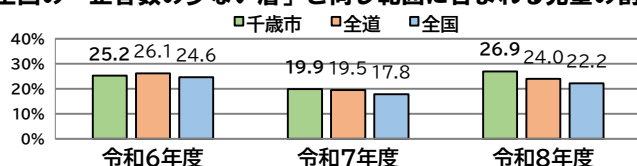


【正答数分布】

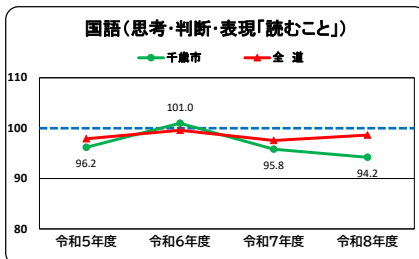
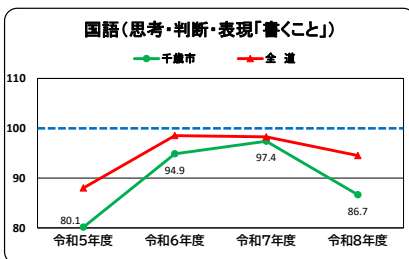
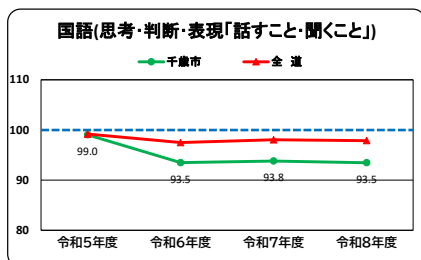
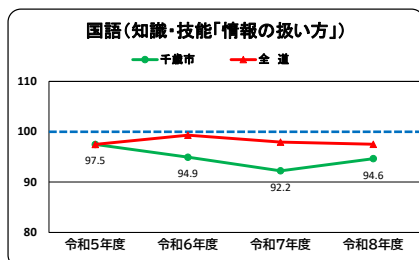
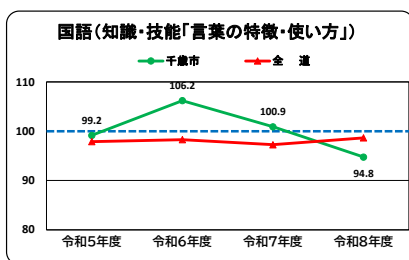


正答数の少ない層の割合は、前回より 7.0 ポイント増加し、全国より 4.7 ポイント高い状況になった。正答数の多い層の割合は、全国より少ない状況にある。

【全国の「正答数の少ない層」と同じ範囲に含まれる児童の割合】



【区分別正答率の経年変化】



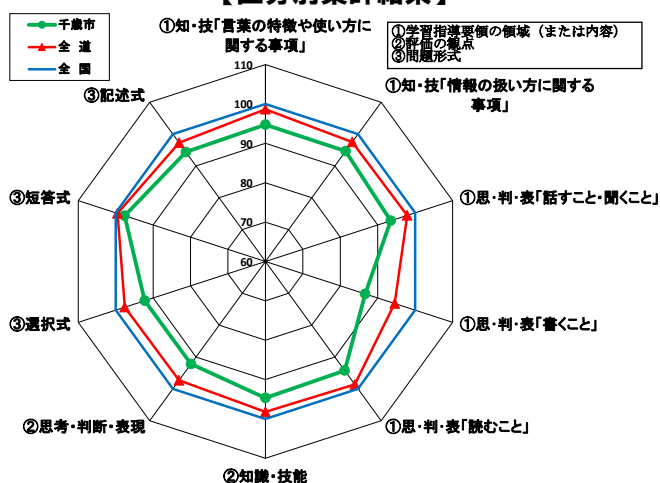
「我が国の言語文化に関する事項」の出題がなかった。

区分別では、「情報の扱い方」が前回は上回ったものの、「話すこと・聞くこと」が横ばい、他の区分が前回は下回った。

全国の正答率を上回った問題は、「言葉の特徴や使い方に関する事項」の漢字を正しく使う問題、「情報の扱い方」の考えとそれを支える理由や事例など情報と情報との関係について理解する問題、「読むこと」の文章を読んで理解したことに基づいて自分の考えをまとめる問題であった。全国との差が特に大きかった問題は、「話すこと・聞くこと」の相手に伝わるように理由や事例などを挙げながら話の中心が明確になるよう話の構成を考える問題、「書くこと」の引用して自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫する問題、「読むこと」の目的に応じて必要な情報を見付ける問題であった。

評価の観点では、「知識・技能」の正答率が全国を3.3下回り、「思考・判断・表現」の正答率が全国を4.7下回った。問題形式では、短答式、選択式、記述式すべてにおいて全国を下回った。16問全問で無解答率が全国を下回った。

【区分別集計結果】



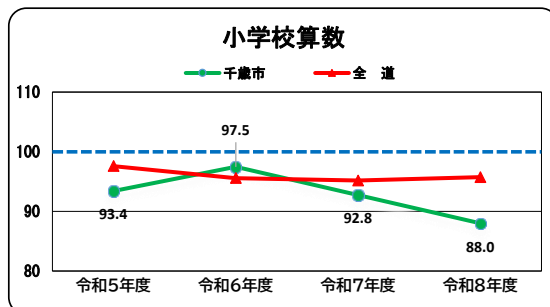
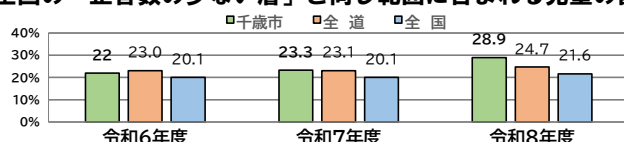
(4) 小学校算数

平均正答率は、今回、全国との差が広がり、前回の「やや低い」から「低い」となった。区分別では、「測定」が前回は上回った。すべての区分で全国を下回った。

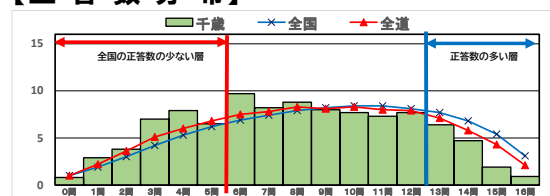
【平均正答率】 上段：平均正答率、下段：全国平均を100とした指数

	令和5年度	令和6年度	令和7年度	令和8年度
千歳市	58.4 93.4	61.8 97.5	53.8 92.8	49.6 88.0
全 道	61 97.6	60.6 95.6	55.2 95.2	53.6 95.0
全 国	62.5 100	63.4 100	58.0 100	56.4 100

【全国の「正答数の少ない層」と同じ範囲に含まれる児童の割合】

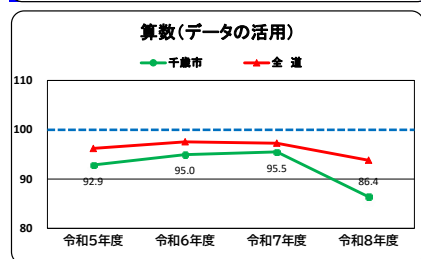
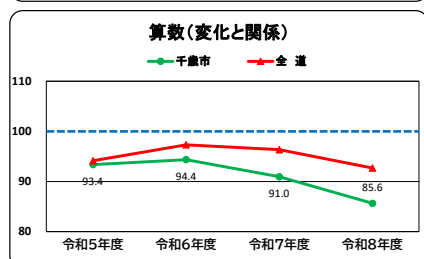
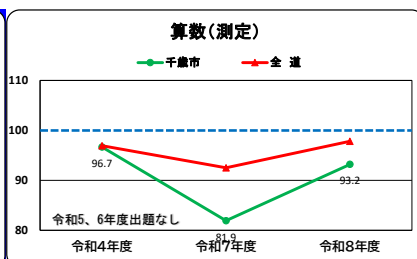
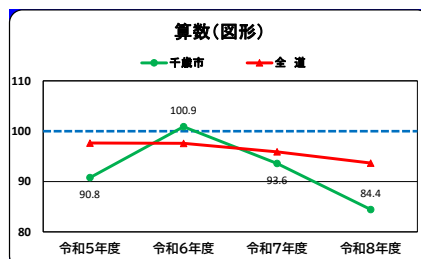
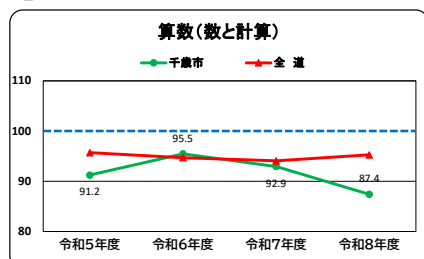


【正 答 数 分 布】



正答数の少ない層の割合は、前回より5.6ポイント増加し、全国より7.3ポイント高い状況になった。正答数の多い層の割合は、全国より少ない状況にある。

【区分別正答率の経年変化】



区分別では、「測定」が前回は大きく上回ったものの、他の区分が前回は下回った。

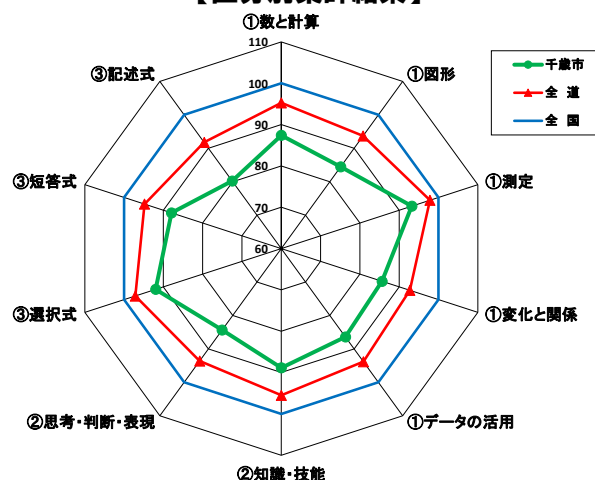
全国を正答率を上回った問題は、「変化と関係」の単位量当たりの大きさを求める除法の式の意味を理解し、その商から二つの広場のどちらの方が混んでいるのかについて判断する問題であった。

全国との差が特に大きかった問題は、「数と計算」の整数と小数の減法の計算をする問題、「図形」の日常生活の問題を解決するために図形を構成する要素に着目して直方体の三つの辺の長さを捉え示された条件を基に調べたい数量の求め方を数や言葉を用いて記述する問題、「変化と関係」の基準量、比較量、割合の関係が正しく表されている図を選ぶ問題であった。「データの活用」は、全問の正答率が全国に及ばなかった。

評価の観点では、「知識・技能」の正答率が全国を11.1下回り、「思考・判断・表現」の正答率が全国を15.6下回った。

問題形式では、短答式、選択式、記述式すべてにおいて全国を下回った。16問中11問の無解答率が全国を下回った。

【区分別集計結果】



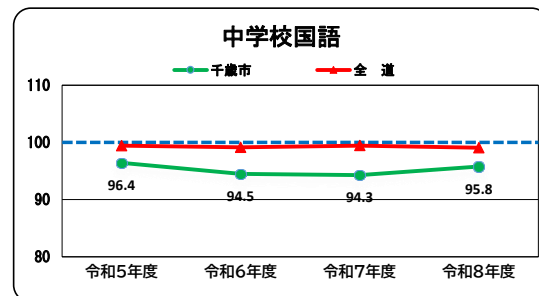
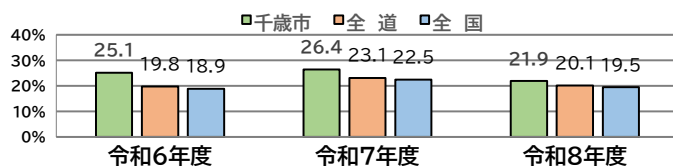
(5) 中学校国語

平均正答率は、全国との差を縮めたが、「やや低い」の状況にとどまった。区別では、「書くこと」、「話すこと・聞くこと」が前回を上回った。「書くこと」は全国を上回った。

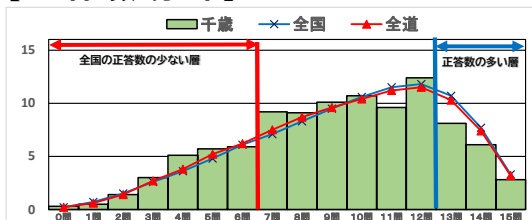
【平均正答率】 上段：平均正答率、下段：全国平均を100とした指数

	令和5年度	令和6年度	令和7年度	令和8年度
千歳市	67.3 96.4	54.9 94.5	51.2 94.3	61.2 95.8
全道	69.4 99.4	57.6 99.1	54.0 99.4	63.3 99.1
全国	69.8 100	58.1 100	54.3 100	63.9 100

【全国の「正答数の少ない層」と同じ範囲に含まれる児童の割合】

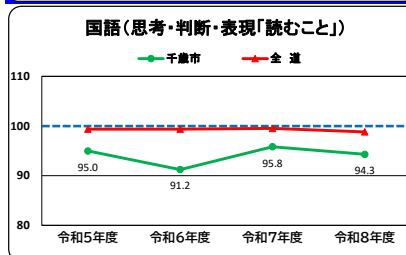
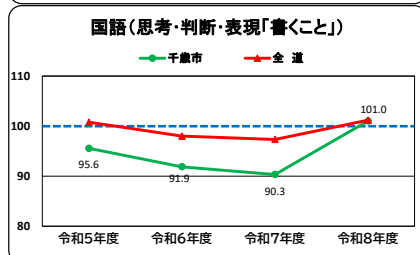
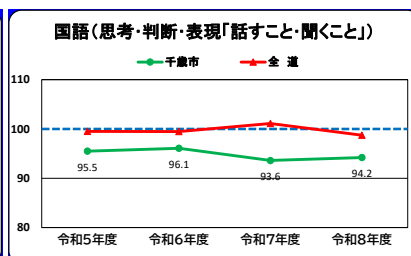
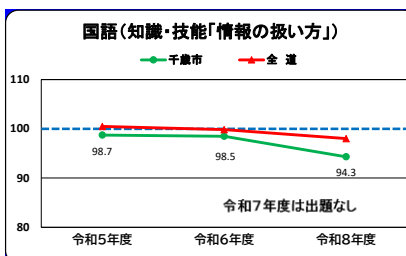
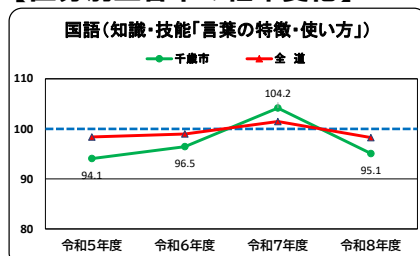


【正答数分布】



正答数の少ない層の割合は、前回より 4.5 ポイント減少し、全国より 2.4 ポイント多い状況になった。正答数の多い層の割合は、全国より少ない状況にある。

【区別正答率の経年変化】



「我が国の言語文化に関する事項」の出題がなかった。

区別では、「書くこと」が急上昇し、全国を上回った。「話すこと・聞くこと」が横ばい、他の区分が前回を下回った。

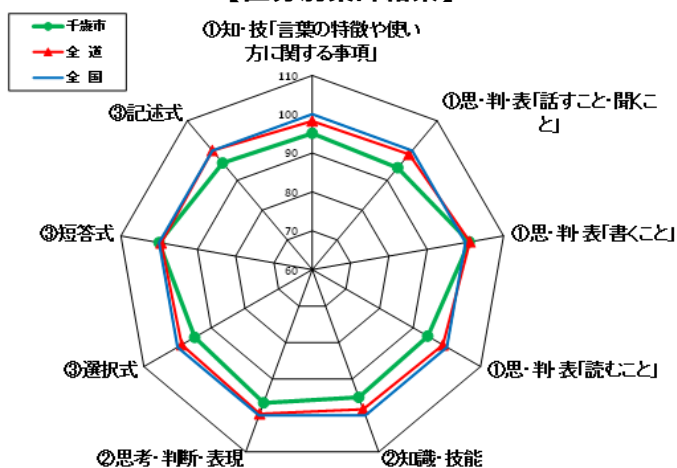
全国を正答率を上回った問題は、「言葉の特徴や使い方に関する事項」の語句の辞書的な意味を踏まえ、文脈上の意味を捉える問題と、「書くこと」の表現の効果を考え、描写する問題と表現の工夫とその効果について読み手からの助言を踏まえよい点や改善点を見いだす問題であった。

全国との差が特に大きかった問題は、「言葉の特徴や使い方に関する事項」の単語の類別の問題、「話すこと・聞くこと」の互いの立場や考えを尊重しながら話し合い、結論を導くために考えをまとめる問題、「読むこと」の目的に応じて必要な情報に着目して要約し、内容を解釈する問題であった。

評価の観点では、「知識・技能」の正答率が全国を 3.2 下回り、「思考・判断・表現」の正答率が全国を 2.2 下回った。

問題形式では、短答式が全国と同じ状況で、選択式、記述式が全国を下回った。15 問中 10 問の無解答率が全国を下回った。

【区別集計結果】



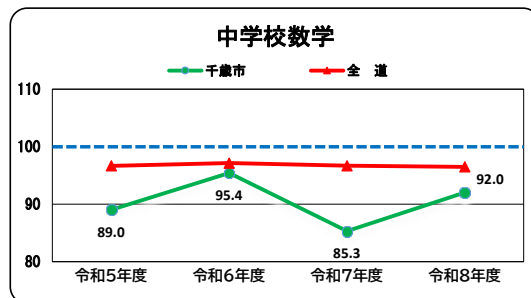
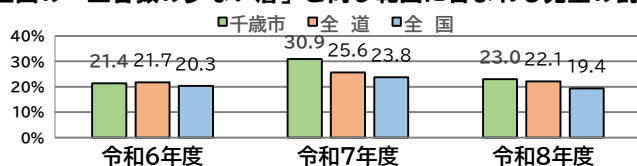
(6) 中学校数学

平均正答率は、全国との差を縮め、前回の「相当低い」から「やや低い」の状況となった。「数と式」は急上昇するなど、すべての領域が前回を上回った。

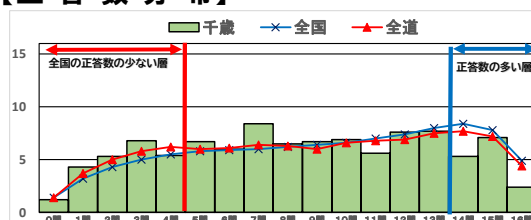
【平均正答率】 上段：平均正答率、下段：全国平均を100とした指数

	令和5年度	令和6年度	令和7年度	令和8年度
千歳市	45.4 89.0	50.1 95.4	41.2 85.3	52.4 92.0
全 道	49.3 96.7	51.0 97.1	46.7 96.7	55.0 96.5
全 国	51 100	52.5 100	48.3 100	57.0 100

【全国の「正答数の少ない層」と同じ範囲に含まれる児童の割合】

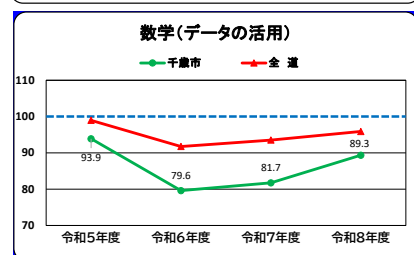
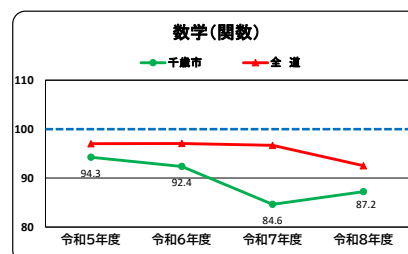
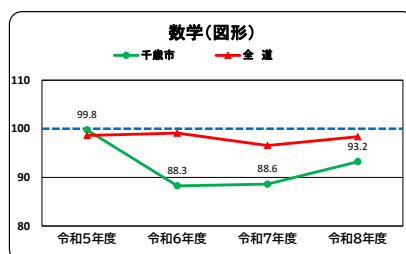
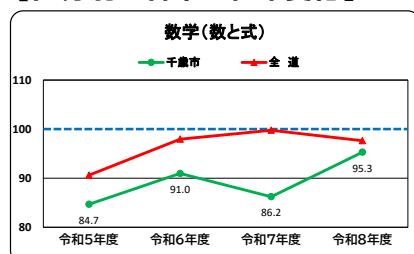


【正 答 数 分 布】

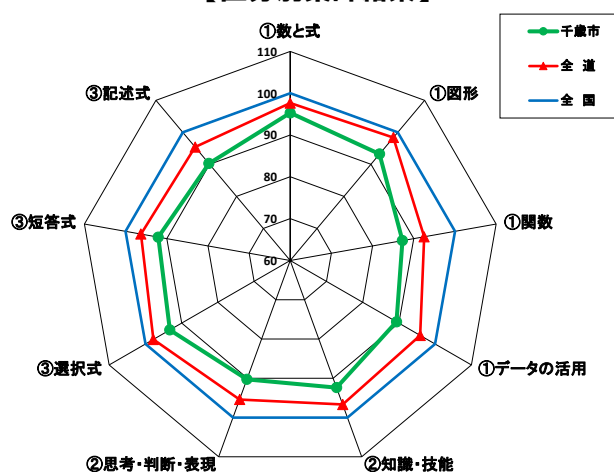


正答数の少ない層の割合は、前回より7.9ポイント減少し、全国より3.6ポイント多い状況となった。正答数の多い層の割合は、全国より少ない状況にある。

【区分別正答率の経年変化】



【区分別集計結果】



区分別では、すべての領域が前回を上回り、全国との差を縮めた。特に、急上昇した「数と式」は、この調査が現行の学習指導要領に対応してから、最もよい成績となった。「関数」は前回、「図形」と「データの活用」は、前々回から低迷していたが、回復の兆しを感じられる。

全国を正答率を上回った問題は、「図形」の筋道を立てて考え、証明する問題であった。

全国との差が特に大きかった問題は、「図形」の具体的な事象において考察の対象となる角を的確に捉える問題と具体的な事象を基に証明する事柄の仮定を見いだす問題、「関数」の反比例の関係を表す表の特徴を捉えてxの値に対応するyの値を求める問題、「データの活用」の累積度数の意味の理解に関する問題とデータの傾向を的確に捉え、判断の理由を度数分布多角形の特徴を基に説明する問題であった。

評価の観点では、「知識・技能」の正答率が全国を4.8下回り、「思考・判断・表現」の正答率が全国を3.8下回った。

問題形式では、短答式、選択式、記述式すべてにおいて全国を下回った。16問中11問の無解答率が全国を下回った。

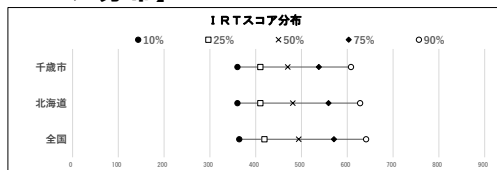
(7) 中学校英語

IRT スコアは、全国を下回った。公開問題においては、全ての領域が前回を上回った。「聞くこと」が全国を上回った。

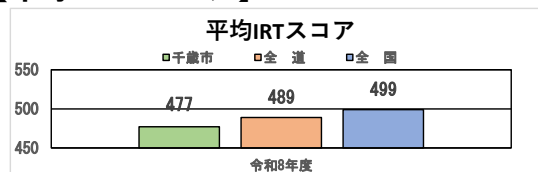
【IRT スコア】 上段：IRT スコア 下段：全国平均を 100 とした指数

	平均IRT スコア	パーセンタイル値				
		10%	25%	50%	75%	90%
千歳市	477	360	410	470	538	608
	95.6	98.9	97.9	95.1	94.2	94.9
全 道	489	360	410	481	559	628
	98.0	98.9	97.9	97.4	97.9	98.0
全 国	499	364	419	494	571	641
	100	100	100	100	100	100

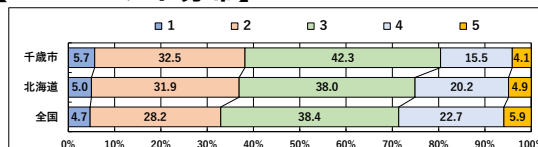
【IRT スコア分布】



【平均IRTスコア】



【IRTバンド分布】

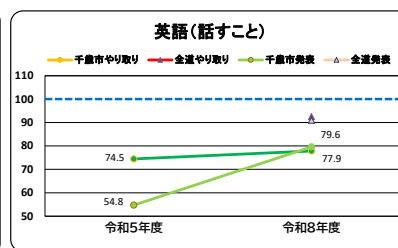
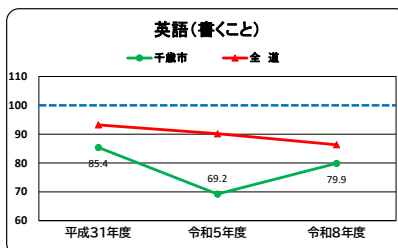
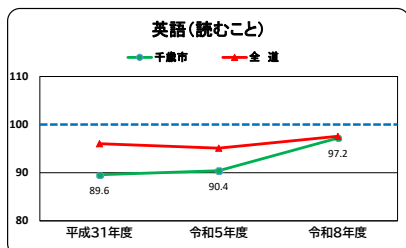
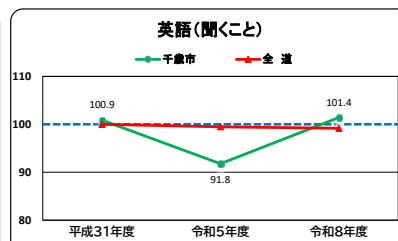
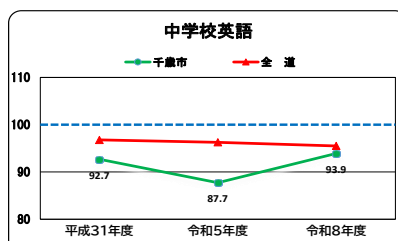


IRT スコアが低い層の割合は全国より多く、IRT スコアが高い層の割合は全国より少ない状況となっている。中央値(50%のスコア)は全国より低くなっている。

以下、公開問題の結果について示す。

【正答率の経年変化】

	平成31年度	令和5年度	令和8年度
千歳市	51.9	40	50.5
	92.7	87.7	93.9
全 道	54.2	43.9	51.4
	96.8	96.3	95.5
全 国	56.0	45.6	53.8
	100	100	100



区分別では、すべての領域が前回を上回った。「聞くこと」は全国を上回り、他領域は全国との差を縮めた。

全国の正答率を上回った問題は、「聞くこと」の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどの知識を、聞くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用する問題と社会的な話題について話を聞き、要点を捉える問題、「読むこと」の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどの知識を、読むことによる実際のコミュニケーションにおいて活用する問題と日常的な話題について、自分の置かれた状況などから判断して、必要な情報を読み取る問題であった。

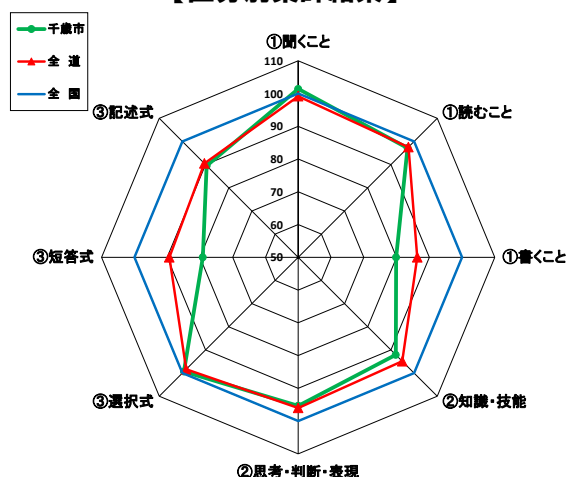
全国との差が特に大きかった問題は、「聞くこ

と」の日常的な話題について、話を聞き、概要を捉える問題、「書くこと」の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどの知識を書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用する問題と日常的な話題について事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、まとまりのある文章を書く問題などであった。

評価の観点では、「知識・技能」の正答率が全国を4.7下回り、「思考・判断・表現」の正答率が全国を2.3下回った。

問題形式では、短答式、選択式、記述式すべてにおいて全国を下回った。16問中12問の無解答率が全国を下回った。

【区分別集計結果】



3 児童生徒質問調査の結果

令和8年度の調査においては、一人一人の指導に生かすための項目を引き続き悉皆調査としつつ、全体の傾向を把握するための項目の一部について、MEXCBTの機能を活用して「ランダム方式」が施行された。児童には34項目、生徒には52項目に「ランダム方式」を採用し、ランダムに選ばれた項目のみを解答する形がとられた。

これまでと同様に6つの観点で示す。悉皆調査の中から、前回と比較できる項目について抽出し、肯定的に捉えている児童生徒の割合を全国比で示している。

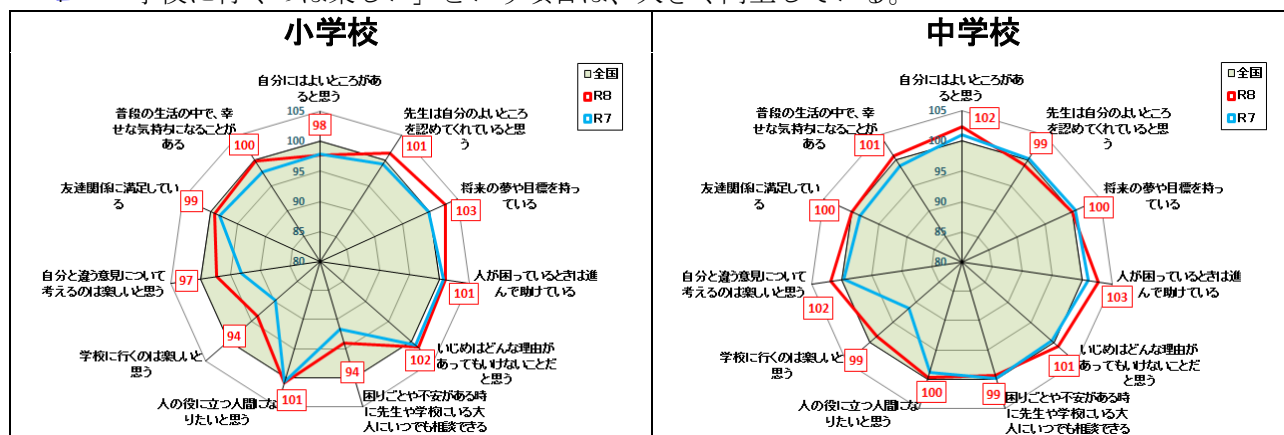
(1) 挑戦心、達成感、規範意識、自己有用感、幸福感等

【小学校】

- 11項目中10項目が『標準的』で、2項目が全国平均より『やや低い』状況にある。
- 全国平均以上の項目は6項目（R7は4項目）で、全体的に向上傾向にある。
- 全国平均より「やや低い」状況にあるのは、「困りごとや不安があるときに、先生や学校にいる大人にいつでも相談できる」「学校に行くのは楽しいと思う」の2項目だが、前回より向上している。

【中学校】

- 11項目全てが『標準的』である。
- 全国平均以上の項目は8項目（R7は7項目）で、全体的に向上傾向にある。
- 「学校に行くのは楽しい」という項目は、大きく向上している。



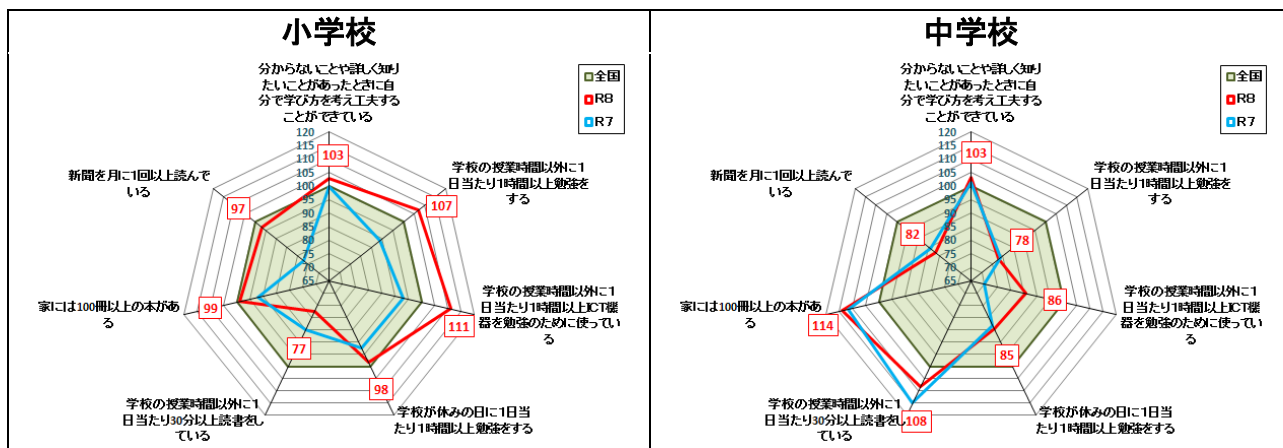
(2) 学習習慣、学習環境等

【小学校】

- 7項目中6項目が『標準』以上で、1項目が全国平均より『かなり低い』状況にある。
- 全国平均以上の項目は3項目（R7は1項目）で、全体的に向上傾向にある。その中で、特に大きく向上したのは、「学校の授業時間以外に1日当たり1時間以上勉強をする(+18p)」「学校の授業時間以外に1日当たり1時間以上ICT機器を勉強のために使っている(+18p)」「学校が休みの日に1日当たり1時間以上勉強をする(+6p)」「新聞を月に1回以上読んでいる(+20p)」の4項目である。
- 全国平均より「かなり低い」状況にあるのは、「学校の授業時間以外に1日当たり30分以上読書をしている」の1項目で、前回より8p低下している。

【中学校】

- 7項目中3項目が『標準』以上で、4項目が全国平均より『低い』『かなり低い』状況にある。
- 全国平均以上の項目は3項目（R7も3項目）で、前回と同様の傾向にある。その中で、特に大きく向上したのは、「学校の授業時間以外に1日当たり1時間以上ICT機器を勉強のために使っている(+16p)」の1項目である。
- 全国平均より「低い」状況にあるのは、「学校の授業時間以外に1日当たり1時間以上ICT機器を勉強のために使っている」「学校が休みの日に1日当たり1時間以上勉強をする」の2項目で、前回とほぼ変わっていない。
- 全国平均より「かなり低い」状況にあるのは、「学校の授業時間以外に1日当たり1時間以上勉強をする」「新聞を月に1回以上読んでいる」の2項目で、前回とほぼ変わっていない。



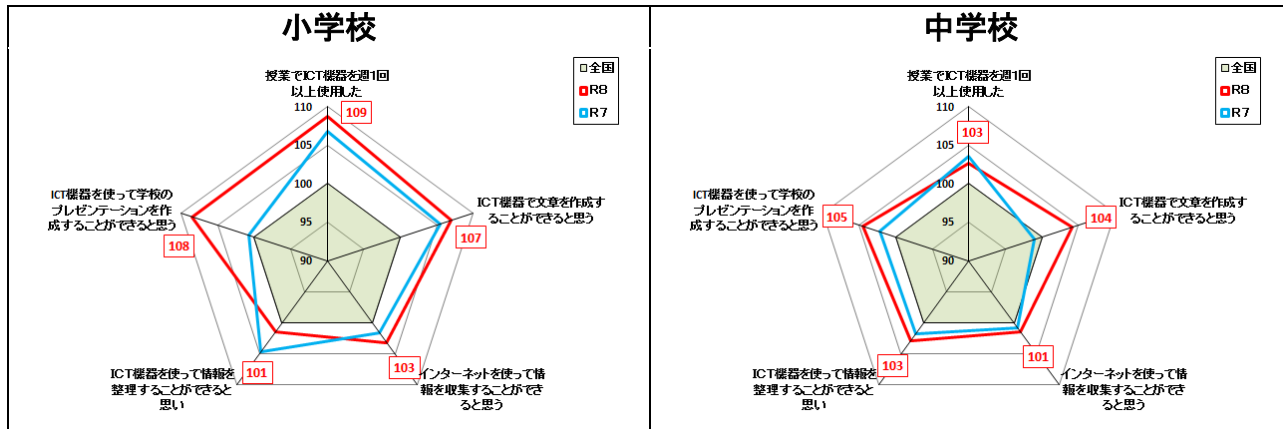
(3) ICTを活用した学習状況等

【小学校】

- 5項目中全項目が『標準』以上である。
- 全国平均以上の項目は5項目（R7も5項目）で、前回と同様の傾向にある。その中で、特に大きく向上したのは、「ICT機器を使って学校のプレゼンテーションを作成することができると思う（+7p）」の1項目である。

【中学校】

- 5項目中全項目が『標準』以上である。
- 全国平均以上の項目は5項目（R7は4項目）で、全体的に向上傾向にある。その中で、特に大きく向上したのは、「ICT機器で文章を作成することができると思う（+5p）」の1項目である。



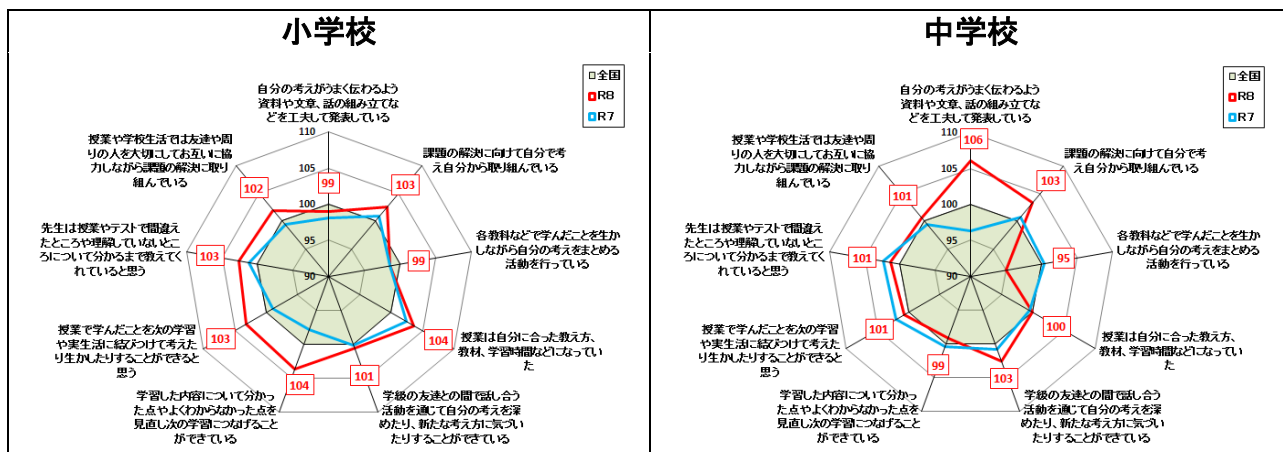
(4) 主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善に関する取組状況

【小学校】

- 9項目中全項目が『標準』以上である。
- 全国平均以上の項目は7項目（R7は4項目）で、全体的に向上傾向にある。その中で、特に大きく向上したのは、「学習した内容について分かった点やよくわからなかった点を見直し次の学習につなげることができる（+6p）」の1項目である。

【中学校】

- 5項目中全項目が『標準』以上である。
- 全国平均以上の項目は7項目（R7は6項目）で、全体的に向上傾向にある。その中で、特に大きく向上したのは、「自分の考えがうまく伝わるよう資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表している（+10p）」の1項目である。



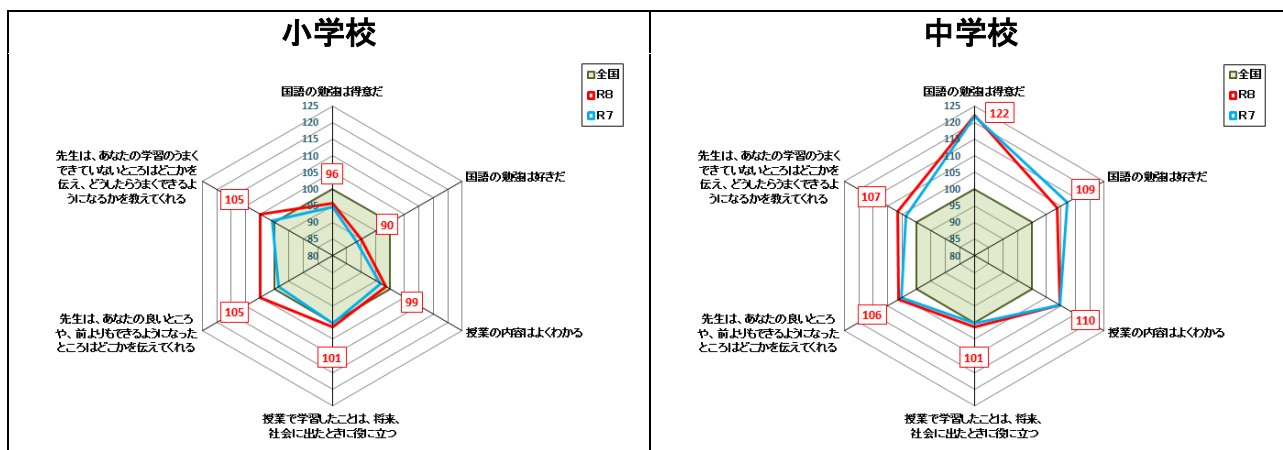
(5) 学習に対する興味・関心や授業の理解度等（国語）

【小学校】

- 6項目中5項目が『標準』以上で、1項目が全国平均より『やや低い』状況にある。
- 全国平均以上の項目は3項目（R7は2項目）で、全体的に向上傾向にある。その中で、特に大きく向上したのは、「先生は、あなたの良いところや、前よりもできるようになったところはどこかを伝えてくれる(+6p)」の1項目である。

【中学校】

- 6項目中全項目が『標準』以上である。
- 全国平均以上の項目は6項目（R7も6項目）で、前回と同様の傾向にある。



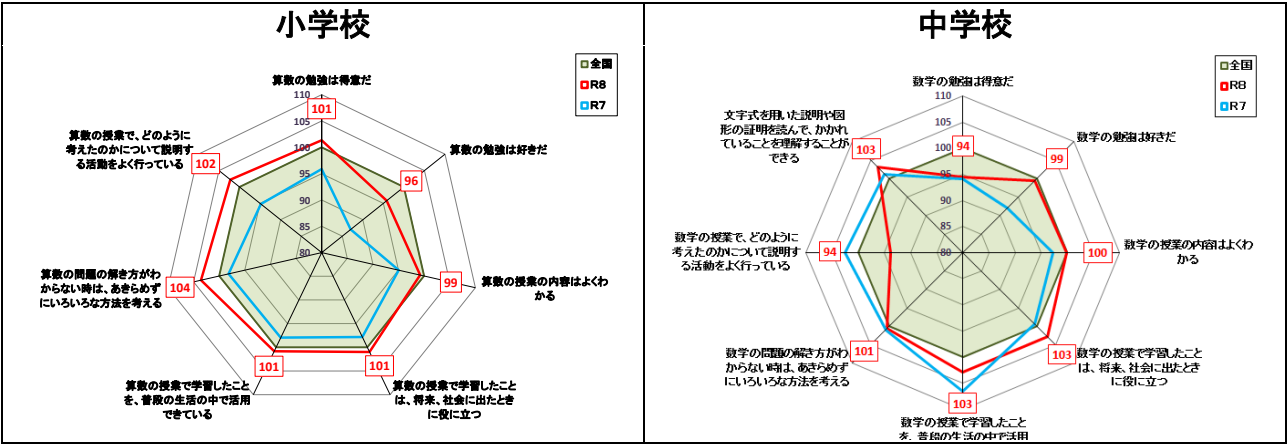
(6) 学習に対する興味・関心や授業の理解度等（算数・数学）

【小学校】

- 7項目中全項目が『標準』以上である。
- 全国平均以上の項目は5項目（R7は0項目）で、全体的に向上傾向にある。その中で、特に大きく向上したのは、「算数の勉強は得意だ(+5p)」「算数の勉強は好きだ(+9p)」「算数の問題の解き方がわからない時は、あきらめずにいろいろな方法を考える(+6p)」「算数の授業で、どのように考えたのかについて説明する活動をよく行っている(+7p)」の4項目である。

【中学校】

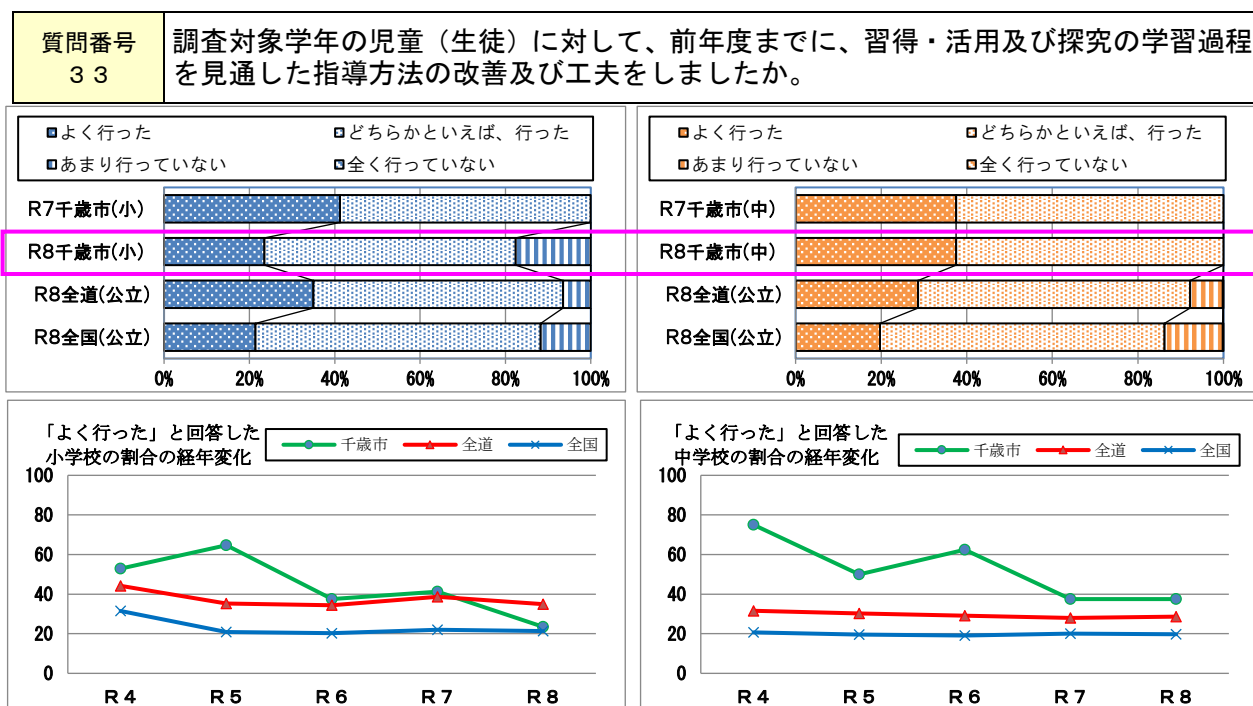
- 8項目中6項目が『標準』以上で、2項目が全国平均より『やや低い』状況にある。
- 全国平均以上の項目は5項目（R7は4項目）である。その中で、特に大きく向上したのは、「数学の勉強は好きだ(+7p)」の1項目である。
- 全国平均より「やや低い」状況にあるのは、「数学の勉強は得意だ(±0p)」「数学の授業で、どのように考えたのかについて説明する活動をよく行っている(-9p)」の2項目である。



4 学校質問調査の結果

1 千歳市学力向上検討委員会の学校への提言に関して

① 探究型・対話型授業の確立と習得型・反復型授業の充実

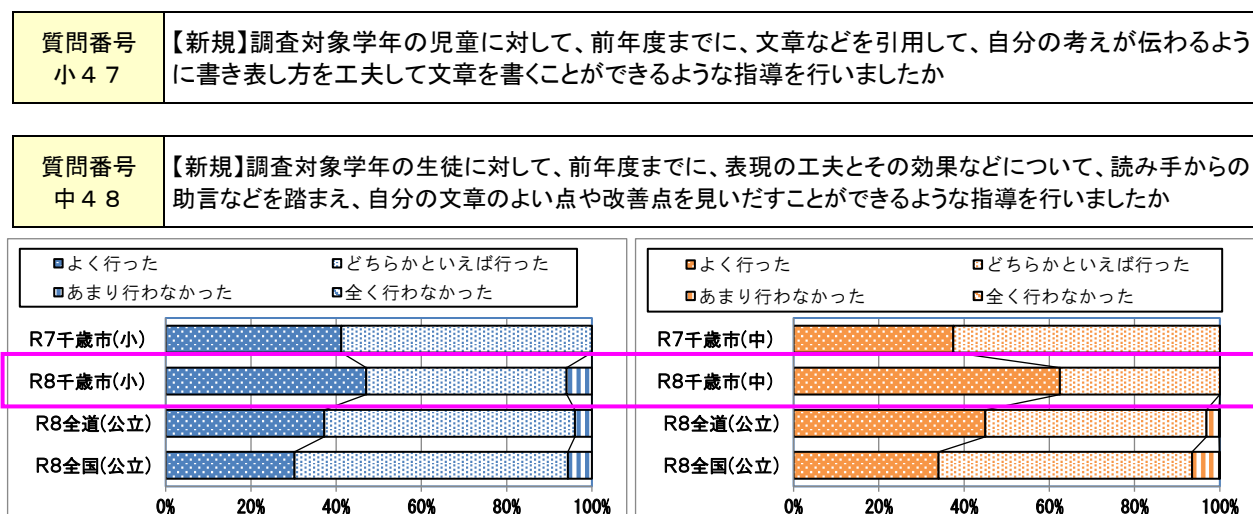


小学校の割合低下を踏まえた継続的な授業改善の推進が必要

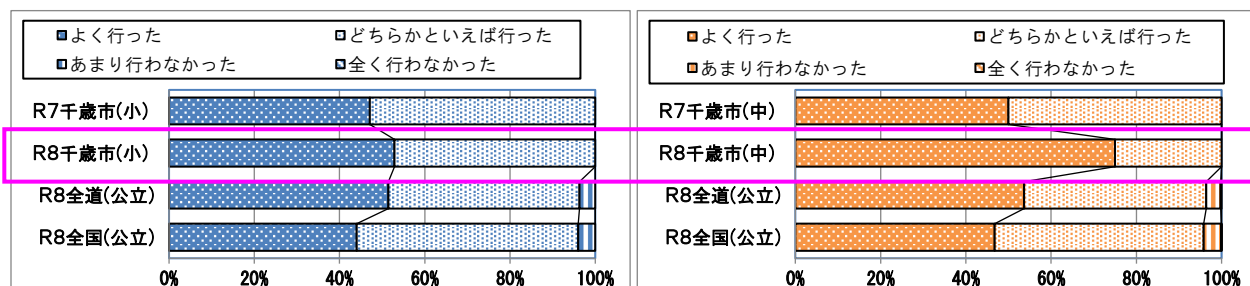
「習得・活用及び探究の学習過程を見通した指導方法の改善および工夫」を「よく行った」と回答した割合は、小学校が23.5%（全国21.4%）、中学校が37.5%（全国19.7%）であった。昨年と比較すると、中学校は同率を維持した一方、小学校は前年の41.2%から17.7ポイントと大幅に低下した。

学習指導要領がめざす「知識・技能の習得」と「思考力・判断力・表現力の育成」には、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が求められる。市内で否定的な回答をしている学校もあり、小学校における急激な数値の低下からは、組織的な授業改善の推進に課題があると推察される。本市が目指す「探究型・対話型」授業と「習得型・反復型」授業のバランスある推進に向け、小学校の取組の再検証とさらなる充実が求められる。

② 読解力・記述力の向上 ～思考力・判断力・表現力の育成（国語、算数・数学）



質問番号 51	調査対象学年の児童(生徒)に対する算数(数学)の授業において、前年度までに、問題の答えを求めさせるだけでなく、どのように考え、その答えになったのかなどについて、根拠を明確にして児童(生徒)に筋道を立てて説明させるような授業を行いましたか
------------	--



「読解力・記述力」向上には組織的・継続的な指導が不可欠

国語における「文章等を引用し、自分の考えが伝わるよう書き表し方を工夫する指導（小47・中48）」について、「よく行った」と回答した小学校は47.1%で全国（30.2%）を16.9ポイント上回り、中学校は62.5%で全国（34.0%）を28.5ポイントと大幅に上回った。

また、算数・数学の「答えを求めさせるだけでなく、根拠を明確に筋道を立てて説明させる授業（質問51）」では、小学校が52.9%（全国43.9%）、中学校が75.0%（全国46.7%）で、ともに全国平均を上回った。

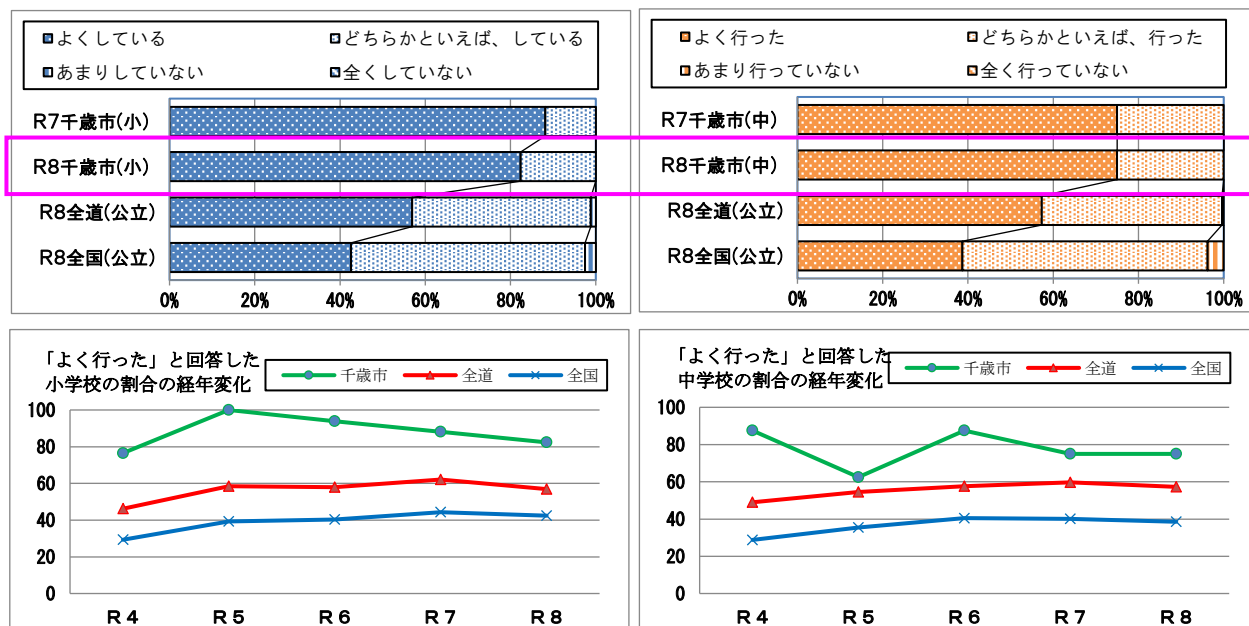
国語・算数（数学）ともに「どちらかといえば行った」を含めると、小中学校ともにすべての学校で「読解力・記述力」の向上を意識した授業が組織的に実施されている。

一方で、記述式問題の解答状況から、示された条件を満たして書く表現力や、論理的な思考、算数・数学用語を用いた説明力などには、児童生徒一人一人に引き続き課題が見受けられる。

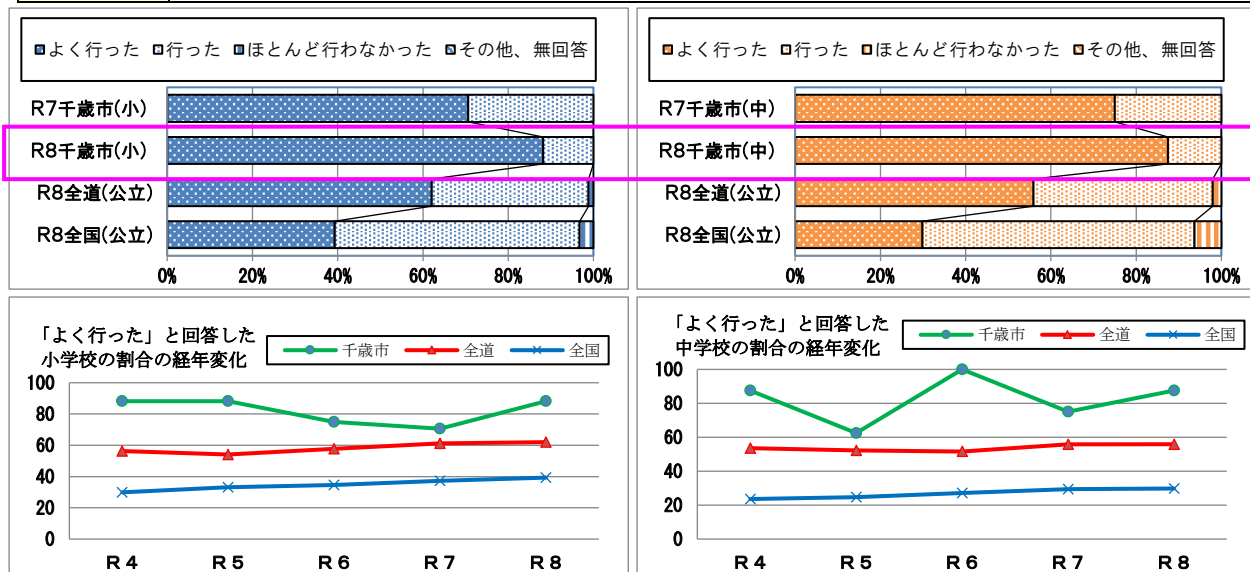
読解力・記述力は短期間で高まるものではなく、全校的な計画のもと、指導を継続することが必要である。本市独自の学習支援員等の体制も有効活用し、授業で記述させる場面や条件の工夫、深い思考を引き出す対話の機会の確保など、発達段階に応じた組織的・継続的な取組の推進が求められる。

③ 「学校改善プラン」の確実な実行

質問番号 15	児童(生徒)の姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立していますか。
------------	---



質問番号 小 84 中 92	令和 7 年度全国学力・学習状況調査の自校の結果について、調査対象学年・教科だけではなく、学校全体で教育活動を改善するために活用しましたか。
-------------------	--



学校改善プランの活用は進むも、さらなる確実な運用が求められる

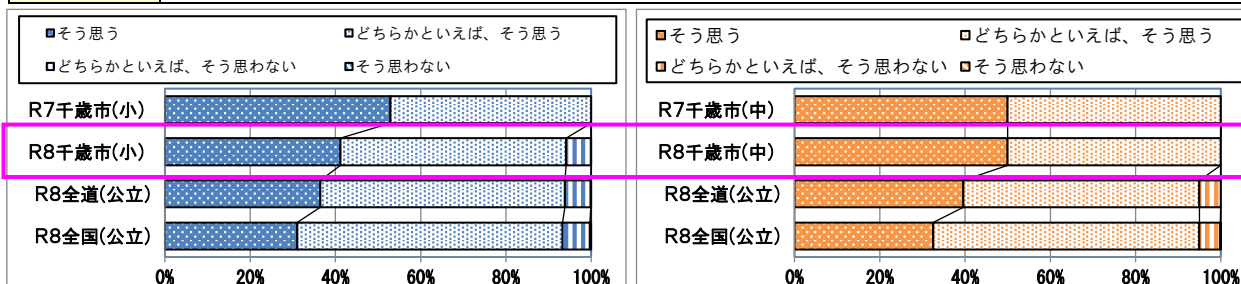
「学校改善プラン」による教育課程のPDCAサイクル確立について、「よくしている」と回答した割合は小学校が82.4%、中学校が75.0%であり、全国平均（小42.5%、中38.6%）を大きく上回った。「どちらかといえばしている」を含めると、前年に引き続き全校で肯定的な状況にある。

また、全国学力・学習状況調査の結果を学校全体で教育活動改善に活用したとの回答は、小学校で88.2%（前年70.6%）、中学校で87.5%（前年75.0%）と、ともに大幅に上昇した。

本市では、自校の調査結果を該当学年・教科の指導改善に限定せず、成果や課題を全校で共有し組織的に活用する体制が強化されている。今後も、プランが形骸化・目的化しないよう留意し、策定した組織的な取組の実行状況を中間評価等で確認しながら、検証・改善サイクルを確実に機能させていくことが重要である。

④ ハイパーQ U検査を活用した学年・学級経営の充実

質問番号 29	児童（生徒）は、授業や学校生活では、友達や周りの人の考えを大切にして、お互いに協力しながら課題の解決に取り組んでいると思いますか
------------	--



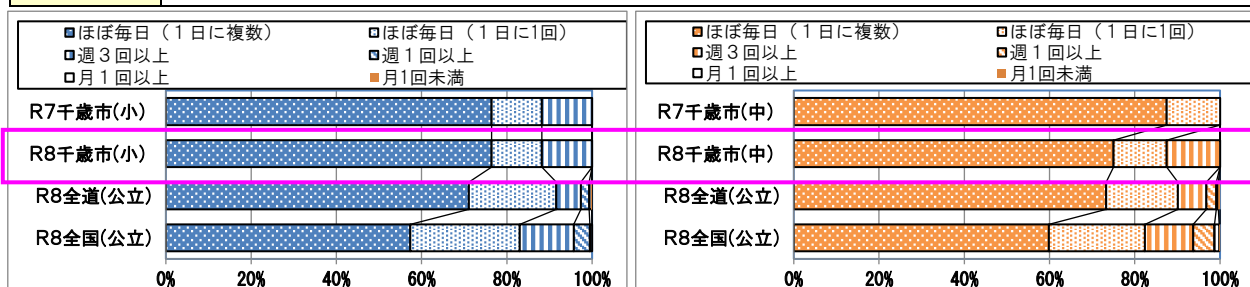
全国を上回る成果と、支持的風土の育成に向けた取組の重要性

友達のことを大切にし、協力して課題解決に取り組んでいると回答した学校の割合（そう思う）は、小学校が41.2%、中学校が50.0%で、ともに全国平均（小31.0%、中32.5%）を上回った。中学校では全校肯定回答を維持した一方、小学校では「そう思う」が低下し一部否定回答が出現している。

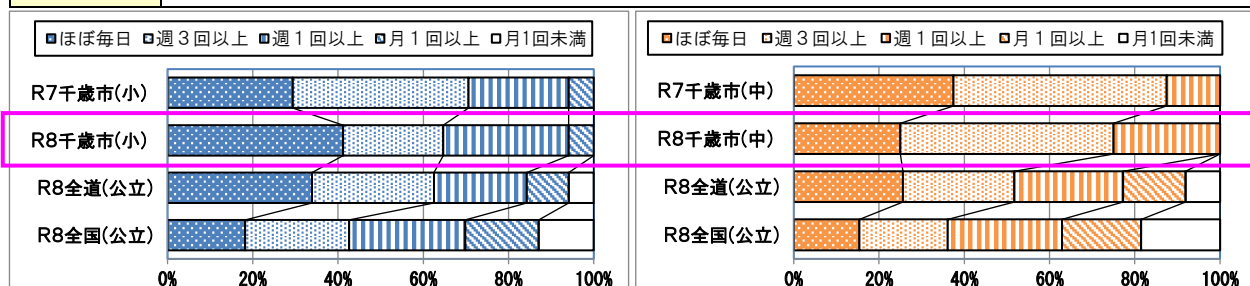
互いを認め合う支持的風土は、「探究型・対話型」授業における学び合いの重要な基盤となる。客観的なデータであるハイパーQ U検査の結果等を活用し、特に小学校での状況のばらつきに留意しながら、児童生徒の自己肯定感や自己有用感を高め、望ましい集団づくりを組織的に進めることが求められる。

⑤ ICT機器の効果的な活用

質問番号 小 60 中 68	調査対象学年の児童（生徒）に対して、前年度までに、児童（生徒）一人一人に配備されたPC・タブレットなどのICT機器を、授業でどの程度活用しましたか。
-------------------	--



質問番号 小 64 中 72	調査対象学年の児童（生徒）同士がやりとりする場面では、児童（生徒）一人一人に配備されたPC・タブレットなどのICT機器をどの程度使用させていますか。
-------------------	--



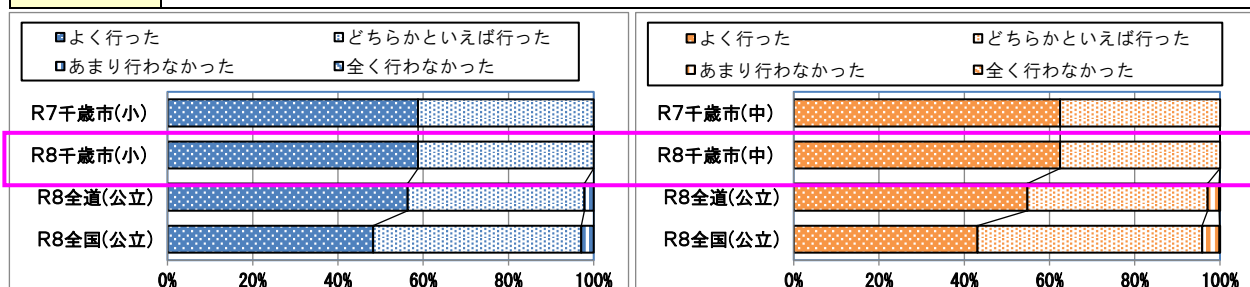
小・中学校ともICT活用が日常化

学習者用端末を「ほぼ毎日」活用している学校は、小学校が88.3%（複数回76.5%、1回11.8%）、中学校が87.5%（複数回75.0%、1回12.5%）に達し、全国平均を大きく上回る日常化が定着している。特に「1日に複数回」という高頻度な活用は、小中ともに全国平均を約15ポイント上回っている。

児童生徒同士が意見交換する場面での「ほぼ毎日」の活用割合は、小学校で41.2%と前年から大幅に上昇（11.8ポイント増）した一方、中学校では25.0%（前年37.5%）に低下した。中学校では週3回以上の活用が75.0%を占めているが、意見交換や協働学習の質を一層高める活用推進が望まれる。

⑥ 習熟度別少人数指導の充実

質問番号 52	調査対象学年の児童（生徒）に対する算数（数学）の授業において、前年度までに、授業で、学習上つまづいた児童（生徒）に対する対応を行っていましたか
------------	---



児童生徒の実態に応じた指導体制と方法の工夫が必要

算数・数学の授業において、学習上「つまづいた児童生徒に対する対応」を「よく行った」と回答した割合は、小学校が58.8%（全国48.2%）、中学校が62.5%（全国43.1%）で、ともに前年度と同率のきわめて高い水準を維持した。こうした指導は、基礎学力の定着や理解の底上げに直結する。

今後も、千歳市独自の学習支援員や加配教員を効果的に参画させ、少人数による習熟度別指導やきめ細かな机間指導を一層充実させるとともに、習得型・反復型指導の質の向上が求められる。

① 教職員研修（ICT活用）

研修機会の質的転換と教員の ICT 指導力向上が授業改善に直結

教員一人一人が専門性を高めて ICT を「思考の道具」として使いこなす授業力を向上させることは、児童生徒の主体的な学びの充実に直結するため、継続的な研修支援が期待される。

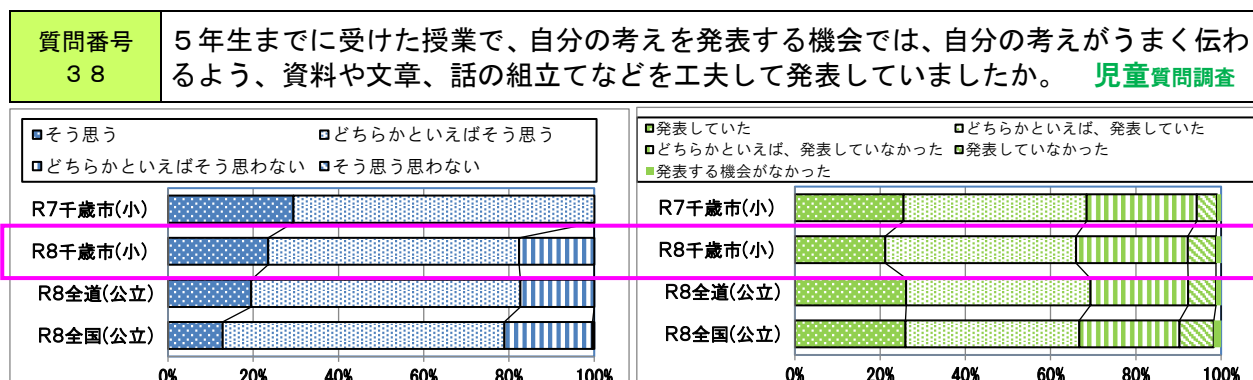
全国を上回るも、接続・実践の継続的な連携が課題

- 16 -

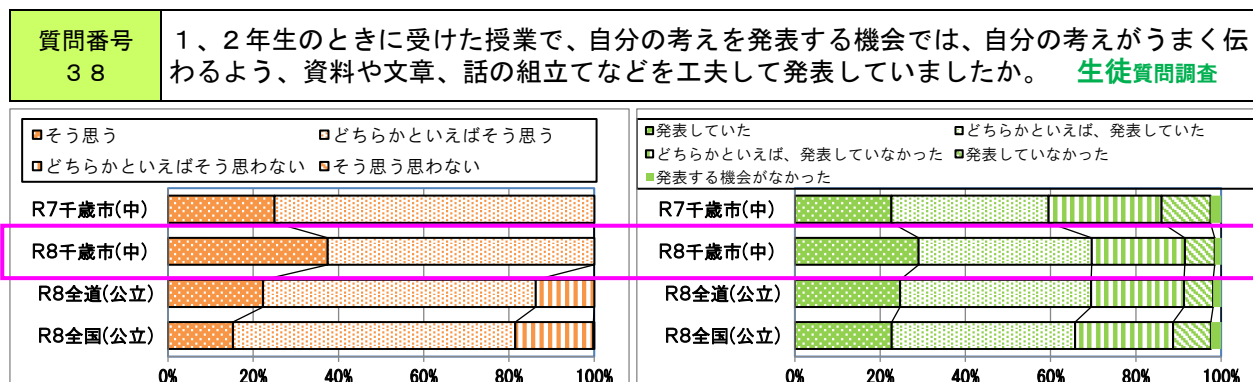
3 授業に対する教師と児童生徒の意識の違い（児童・生徒質問調査の回答と比較）

① 主体的・対話的で深い学びの視点による授業改善—1

質問番号 27	調査対象学年の児童は、授業において、自らの考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して、発言や発表を行うことができていると思いますか。
------------	---



質問番号 27	調査対象学年の生徒は、授業において、自らの考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して、発言や発表を行うことができていると思いますか
------------	--



「伝わる発表」に関する認識に差 小学校で拡大・中学校で劇的縮小

自らの考えがうまく伝わるよう資料や文章を工夫して発表できているかという教員評価では、中学校が肯定100%、小学校が肯定82.3%（そう思わない17.6%）であった。中学校では強く肯定する割合が37.5%へ上昇した一方、小学校では指導に高基準を求め評価が慎重化している。

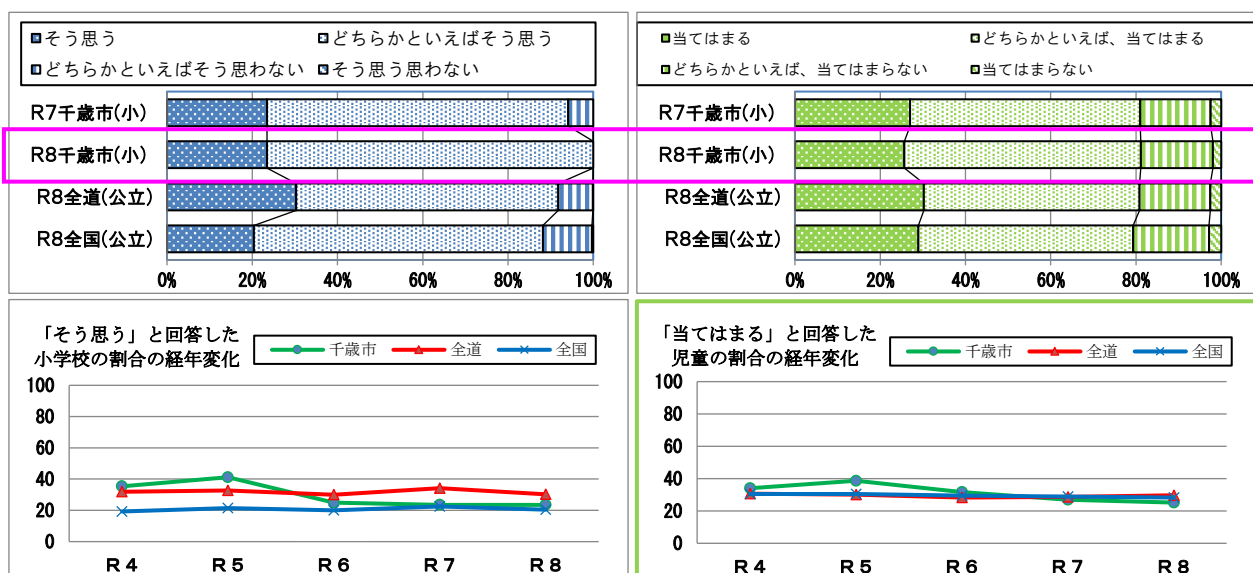
児童生徒への質問「伝わるよう工夫して発表したか」における否定回答は、小学生が32.7%（前年32.6%）と横ばいだったのに対し、中学生は28.8%（前年38.9%）と劇的に減少した。中学校において発表の自己効力感が高まり、教員と生徒の認識の乖離が大幅に縮小したことは大きな成果である。

今後は、小中ともに児童生徒自身が自分の発表力を客観的に振り返ることができるよう、評価基準（ルーブリック）の共有や相互評価など「指導と評価の一体化」を図り、表現の質を自己調整できるような系統的な指導改善を継続していく必要がある。

② 主体的・対話的で深い学びの視点による授業改善—2

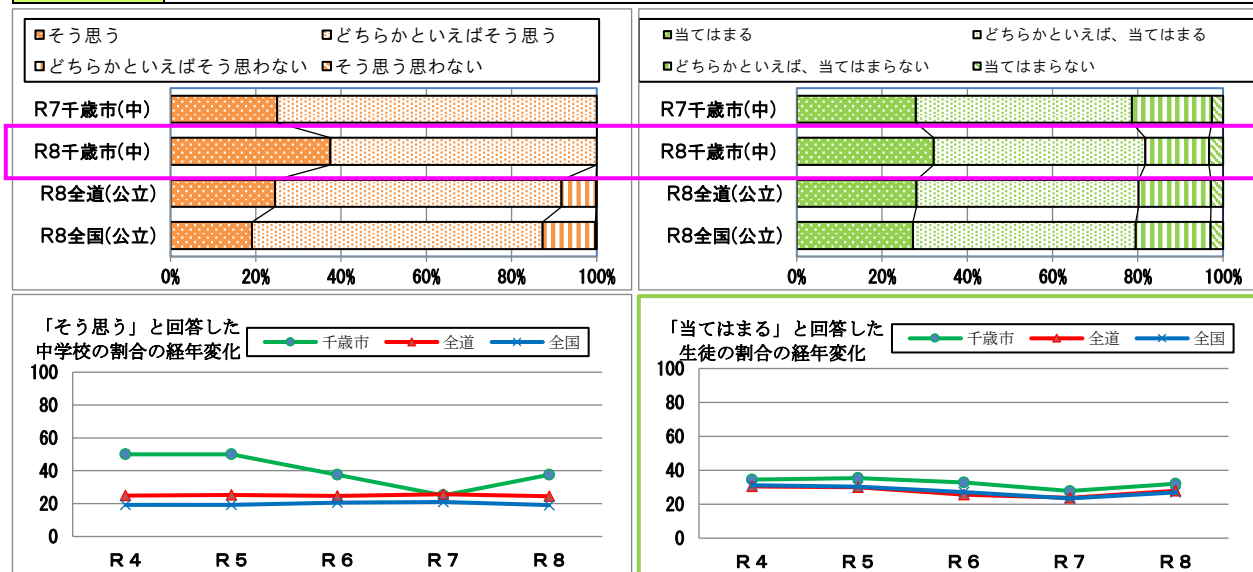
質問番号 26	調査対象学年の児童は、授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組むことができていると思いますか。
------------	---

質問番号 39	5年生までに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか。 児童質問調査
------------	---



質問番号 26 調査対象学年の生徒は、授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組むことができていると思いますか。

質問番号 39 1、2年生のときに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか。 生徒質問調査



児童生徒の実感を踏まえ、主体的な学びの定着を図る授業改善へ

自分で考え主体的に課題解決に取り組んでいるかという教員の肯定評価は、小中学校ともに 100%に達した。特に中学校では「そう思う」が 37.5% (12.5 ポイント増) に上昇し、教員側の児童生徒の学習態度に対する評価はきわめて高水準を維持している。

これに対し、児童生徒質問で「主体的に取り組んだか」に否定的に回答した割合は、小学生が 18.5% (前年 19.0%)、中学生が 18.2% (前年 21.3%) であった。前年比で否定的な層が小中ともに減少し、自分で考え取り組む児童生徒の確かな実感の向上が見られる。

一方で、依然として約 2 割の児童生徒が主体的な学習に課題を感じている。すべての子供が学びの主体者となるためには、授業全体の構成を教員の問いの往復に終始させず、一人一人が問いを立てて学習のプロセスを自己選択できるような、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を意識した授業改善が重要である。